

女子大学生の自己の顔に対する認識度と衣服選択の関係

Relation between Degree of Cognition for Personal Face and Selection in Clothing on Female University Students

西川 愛子 Aiko Nishikawa

(家政学部こどもの生活専攻)

抄 録

衣服と顔の関係を明らかにすることを目的とし、女子大学生を対象に自己の顔に対する認識度についてアンケート調査を行った。その結果、女子大学生は自己の顔をどちらかといえば大きい顔、形の悪い鼻、丸い顎と認識していた。また、因子分析結果から「肌」「目」「鼻」「形」「口」の5因子が抽出され、クラスタ分析から6グループで構成されていることが示された。このうち、「低認識群」では他のグループよりも衣服選択の際に顔と衣服の関係について留意する項目が多いことがわかったが、統計的に有意な差は認められなかった。

キーワード

顔 Face 衣服 Clothing 衣服選択 Selection in Clothing 認識 Cognition

目 次

- 1 はじめに
- 2 方法
 - 2.1 アンケート調査
 - 2.2 分析方法
- 3 結果と考察
 - 3.1 自己の顔・体型・髪型に対する認識度
 - 3.2 顔に関する衣服選択時の意識項目
 - 3.3 自己の顔の各部位に対する認識度
 - 3.4 自己の顔の各部位に対する認識度と衣服選択時の意識項目の関係
- 4 おわりに

1 はじめに

人間には顔がある。顔は視覚や嗅覚、味覚などの感覚を担う目、鼻、口などの器官が備えられており、生命維持に欠かすことのできない身体部位である。また、顔は表情を表す役割や顔の持ち主である「私」のアイデンティティーを他者へ表現する役割をもつ。一方、顔を除いた身体がそのまま「私」のアイデンティティーを他者へ表現することはない。身体から「私」を特定することはタトゥーや特別なアクセサリなどの目印がない限り難しいだろう。そのため、

身体はその表面を衣服で覆うことによって始めて「私」を表現する身体になる。そして、「私」の顔と「私」の身体を組み合わせることによって、より明確な「私」が表現される。すなわち、顔と衣服の組み合わせこそが「私」を示すものであるといえる。

しかし、「私」を表現するためには、どのような「私」を表現したいのかを理解している必要がある。「私」の顔と衣服は表現したい「私」を表すことができているのか、不足しているとすれば何を足し、過剰であるとすれば何を引けばよいのかを知らなければ、

自分自身が納得できる「私」を表現することは難しい。この表現がうまくできなければ、不満を感じずにはいられない。特に、女子大学生は自己表現を日常生活の様々な場面で重視していると思われることから、女子大学生にとって「私」を表現する要素である衣服を選択することは重要な作業になると考えられる。

本研究では衣服と顔の関係を明らかにすることを目的に、前報^{1) 2)}において女子大学生を対象に、自己の顔に対する意識度と衣服選択の関係及び満足度と衣服選択の関係について検討してきた。本報では自己の顔をどのように認識しているかを調査した上で自己の顔と衣服選択の関係について検討した。

2 方法

2.1 アンケート調査

2011年4月～7月に、女子大学生156名を対象に質問紙法によるアンケート調査を行った。無効票を除外した人数は143名(平均18.95歳、標準偏差1.01)であった。

(1) 自己の顔・体型・髪型に対する認識度

自己の顔、体型、髪型の各項目に対して形容詞対を用い、5段階で評価させた。顔に関する形容詞対は地味(1)－派手(5)、女(1)－男(5)、こども(1)－おとな(5)、嫌い(1)－好き(5)の4項目、体型に関する形容詞対は細い(1)－太い(5)、嫌い(1)－好き(5)の2項目、髪型に関する形容詞対は悪い(1)－良い(5)の1項目である。

(2) 顔に関する衣服選択時の意識項目

顔に関する衣服選択時の意識項目については、前報^{1) 2)}と同様のデータを用いた。この調査は「顔を意識して上衣の色を選ぶ」や「顔を意識して下衣の形を選ぶ」などの12項目に、ダミー項目52項目を含む合計64項目に対し、あてはまる項目を全て選択させたもので、選択された項目は1点と換算している。

(3) 自己の顔の各部位に対する認識度

自己の顔の各部位に対する認識度について、「顔の大きさ」、「鼻の高さ」、「肌のしわ」などの28項目に対し、「小(1)－大(5)」や「低(1)－高(5)」、「少(1)－多(5)」といった形容詞対を5段階で評価させた。なお、この28項目は先行研究³⁾および予備調査を参考に選出したものである。

2.2 分析方法

自己の顔の各部位に対する認識度について、前報と同様に、SPSS 17.0 を使用して主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行った。下位尺度の内的整合性の検討にはクロンバックの α 係数を算出し、下位尺度間の相関を求めた。次に、グループ内連結法によるクラスタ分析を行った。なお、各クラスタの人数比率の偏りについては χ^2 検定を行い、群間差については分散分析を行った。また、Tukey のHSD 法による多重比較も行った。そして、自己の顔の各部位に対する認識度と衣服選択時の意識項目の関係について1要因の分散分析を行った。

3 結果と考察

3.1 自己の顔・体型・髪型に対する認識度

図1に自己の顔、体型、髪型に対する認識度を示す。顔に対してはどちらかといえば地味で男っぽい顔、こどもっぽい顔をしていると認識しており、嫌いだと感じていることが示された。しかし、体型に対する顕著な認識とは異なり、比較的弱く認識しているといえる。

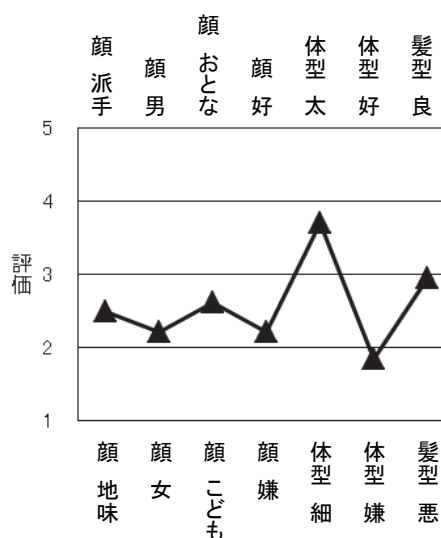


図1 自己の顔・体型・髪型に対する認識度

3.2 顔に関する衣服選択時の意識項目

前報^{1) 2)}と同様の、顔に関する衣服選択時の意識項目を用いた。高い得点が得られた項目は「顔を意識して下衣を選ぶ」「顔を意識して上衣の色を選ぶ」「顔を意識して上衣の柄を選ぶ」であった。一方、それほど高い得点が得られなかった項目は「顔から視線をそらすためのアクセサリ類を用いることが多い」や「顔を意識して上衣の素材を選ぶ」「顔を意識

して下衣の形を選ぶ」であった。

3.3 自己の顔の各部位に対する認識度

(1) 自己の顔の各部位に対する認識度

図2に自己の顔の各部位に対する認識度のプロフィールを示す。この結果、全体としてはいずれの項目もどちらでもないとして認識されているようであるが、どちらかといえば、「顔の大きさ」は大きく、「鼻の形」は悪く、「あごの形」は丸いと認識されていることがわかった。

(2) 自己の顔の各部位に対する認識度の因子分析結果

自己の顔の各部位に対する認識度の評価に使用した28項目のうち、十分な因子負荷量を示さなかった10項目を除外した18項目について因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンを表1に示す。回転後の5因子で18項目の全分散を説明する割合は44.38%であった。なお、この割合の値がそれほど高いものではなかったことから6因子構造および7因子構造で検討したが、説明に適さないパターン行列となったため、5因子構造が妥当であると解釈した。

第1因子は6項目で構成されており、「肌のしわ」

「肌のたるみ」「肌のしみ」など肌に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「肌」因子と命名した。第2因子は3項目で構成されており、「目の大きさ」「まぶたの形」など目に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「目」因子と命名した。第3因子は4項目で構成されており、「鼻の高さ」「鼻の形」など鼻に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「鼻」因子と命名した。第4因子は3項目で構成されており、「顔の形」「口の形」など形に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「形」因子と命名した。第5因子は2項目で構成されており、「口の大きさ」「唇の厚さ」といった口に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「口」因子と命名した。

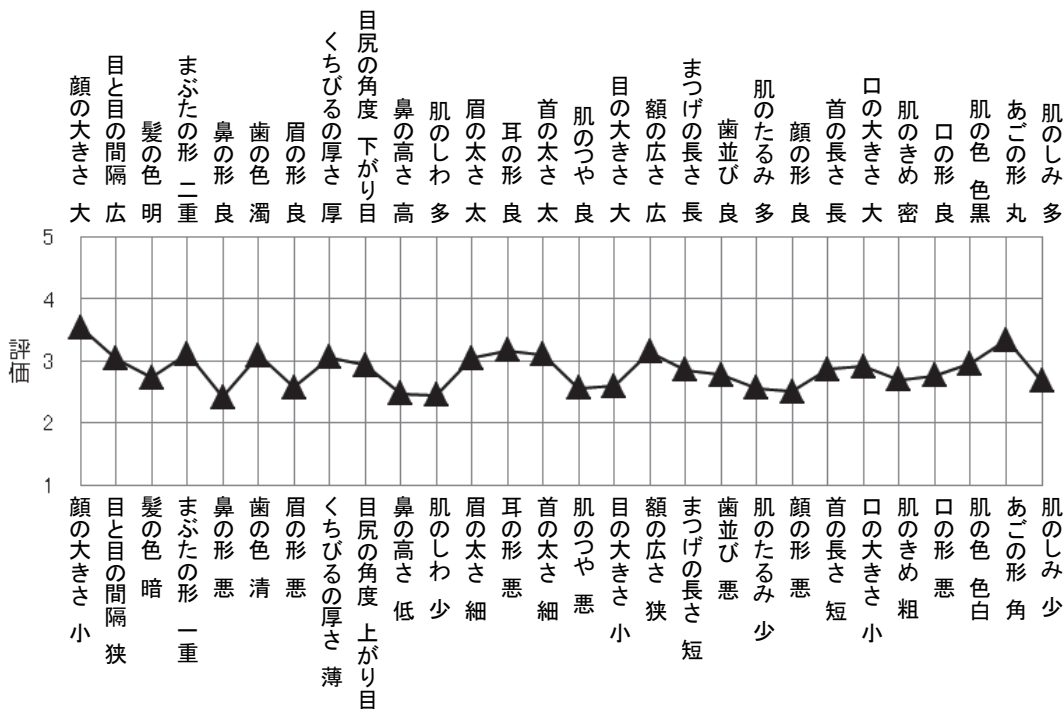


図2 自己の顔の各部位に対する認識度のプロフィール

表1 認識度の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン)

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
肌のしわ 少-多	0.77	0.01	0.13	0.03	0.18
肌のたるみ 少-多	0.70	-0.10	0.07	-0.04	0.13
肌のしみ 少-多	0.52	0.08	-0.13	0.00	-0.08
肌のつや 悪 - 良	-0.48	0.09	0.17	0.14	0.17
肌の色 色白-色黒	0.43	0.06	-0.07	0.08	0.02
肌のきめ 粗 - 密	-0.38	-0.07	0.18	0.22	0.19
目の大きさ 小-大	0.01	0.99	0.11	-0.19	0.05
瞼の形 一重-二重	0.03	0.66	-0.15	0.16	-0.06
まつ毛の長さ短-長	-0.00	0.38	0.00	0.21	0.04
鼻の高さ 低 - 高	-0.01	-0.05	0.83	-0.24	-0.03
鼻の形 悪 - 良	-0.03	0.06	0.58	-0.01	0.03
顔の大きさ 小-大	0.01	-0.07	-0.37	-0.28	0.21
首の長さ 短 - 長	-0.11	-0.12	0.32	0.13	-0.01
顔の形 悪 - 良	0.12	0.11	0.11	0.81	-0.03
口の形 悪 - 良	-0.05	-0.02	-0.05	0.66	0.02
歯並び 悪 - 良	-0.08	0.00	-0.28	0.38	0.10
口の大きさ 小-大	-0.06	0.05	-0.12	-0.08	0.86
唇の厚さ 薄 - 厚	0.23	-0.04	0.07	0.19	0.51
寄与率(%)	18.22	9.17	6.64	5.92	4.43
累積寄与率(%)	18.22	27.39	34.03	39.95	44.38

(3) 下位尺度間の関連

認識度の下位尺度間相関を表2に示す。認識度の5つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「肌」下位尺度得点(平均2.65、SD0.42)、「目」下位尺度得点(平均2.86、SD0.98)、「鼻」下位尺度

得点(平均2.83、SD0.46)、「形」下位尺度得点(平均2.69、SD0.69)、「口」下位尺度得点(平均2.99、SD0.69)とした。内的整合性を検討するために、各下位尺度の α 係数を算出したところ、「肌」で $\alpha=0.16$ 、「目」で $\alpha=0.70$ 、「鼻」で $\alpha=0.03$ 、「形」で $\alpha=0.63$ 、「口」で $\alpha=0.63$ と十分な値が得られなかったものもみられた。「肌」と「口」、「目」と「形」については有意な正の相関が示された。

表2 認識度の下位尺度間相関と平均、SD、 α 係数

	肌	目	鼻	形	口	平均	SD	α
肌	—	0.06	-0.00	-0.09	0.17*	2.65	0.42	0.16
目		—	0.03	0.21*	0.06	2.86	0.98	0.70
鼻			—	0.07	0.06	2.83	0.46	0.03
形				—	0.11	2.69	0.69	0.63
口					—	2.99	0.69	0.63

* $p<0.05$

(4) 認識度による分類

認識度の「肌」得点、「目」得点、「鼻」得点、「形」得点、「口」得点を用いて、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行い、6つのクラスタを得た。第1クラスタには92名、第2クラスタには40名、第3クラスタには7名、第4クラスタには2名、第5クラスタには1名、第6クラスタには1名の調査対象が含まれていた。第4～6クラスタに含まれる調査対象者数は1～2名と少なかったが、いずれのクラスタも個性的な得点傾向にあったため、除外しないこととした。

χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りがみられた($\chi^2=281.57$, $df=5$, $p<0.001$)。

次に、得られた6つのクラスタを独立変数、「肌」「目」「鼻」「形」「口」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「目」「形」「口」のいずれも有意な群間差がみられた(肌: $F(5, 137)=3.40$ $p<0.01$ 、目: $F(5, 137)=35.61$ $p<0.001$ 、鼻: $F(5, 137)=2.36$ $p<0.05$ 、形: $F(5, 137)=11.95$ $p<0.001$ 、口: $F(5, 137)=12.23$ $p<0.001$)。図3に6群の

各得点を示す。

Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較は行えなかった。

第1クラスは、肌、目、鼻、形、口のいずれも中程度の平均値であったため、中認識群とした。第2クラスは、目得点が高かったことから目重視群、第3クラスは口得点が高かったことから口重視群、第4クラスは形および口得点が高かったことから形・口重視群とした。第5クラスは鼻以外の得点が全体的に低かったことから低認識群、第6クラスは目得点が高いが、その他の得点が全体的に低かったことから目重視低認識群とした。

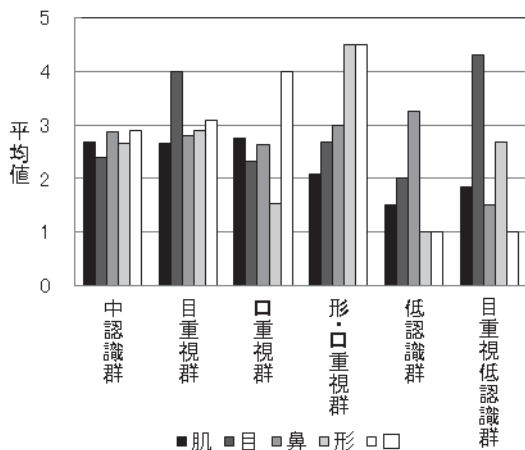


図3 6群の認識度得点

3.4 自己の顔の各部位に対する認識度と衣服選択時の意識項目の関係

認識度による分類で得られた6群の「衣服選択の意識項目」の平均値を図4に示す。6つの認識度によって、「衣服選択の意識項目」の得点が異なるかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。分散分析の結果、群間の得点差に有意な差は認められなかった。 $(F(5, 137) = 1.58, p = 0.17 > 0.05)$ 。

低認識度群は衣服選択の際に顔と衣服の関係について意識する項目が非常に多かった。一方、他の各群は、衣服選択の際にも顔と衣服の関係について意識項目が多くないといえる。

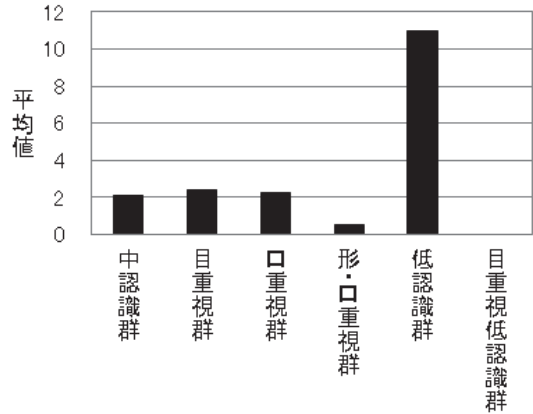


図4 6群の衣服選択の意識項目得点

4 おわりに

衣服と顔の関係を明らかにすることを目的に、女子大学生を対象として自己の顔に対する認識度についてアンケート調査を行った。その結果、女子大学生は自己の顔をどちらかといえば大きい顔、形の悪い鼻、丸い顎と認識していた。また、因子分析結果から「肌」「目」「鼻」「形」「口」の5因子が抽出され、クラスター分析から6グループで構成されていることが示された。このうち、「低認識群」では他のグループよりも衣服選択の際に顔と衣服の関係について留意する項目が多いことがわかったが、統計的に有意な差は認められなかった。

引用文献

- 1) 西川愛子「女子大学生の自己の顔に対する意識度と衣服選択の関係」愛知学泉大学・短期大学紀要 51 p. 15-19 (2017)
- 2) 西川愛子「女子大学生の自己の顔に対する満足度と衣服選択の関係」ライフスタイルデザイン研究誌第3号 p. 49-56 (2018)
- 3) 伊地知美知子、小田巻淑子、小林茂雄「女子学生の身体に対する意識と着装の工夫—1992年と2006年の比較—」家政学会誌 vol. 61 No. 4 pp. 213-220 (2010)

参考文献

- 1) 馬場悠男、金澤英作『顔を科学する！』ニュートンプレス (1999)

(原稿受理年月日 2018年10月11日)